

<今日の説教のポイント コリントの信徒への手紙Ⅱ 1章12-14節>

他人をどう思いながら生きられるかで人生は変わる。その土台とすべきものについて教えられる。長老と執事の任職式にふさわしい箇所。

1 (12) 他者に対して、パウロは憐れみの神様を考えながら行動した。

パウロはここで、「**良心も証しする**」(心からそう思っている) し、「**誇り**」にもしている。それは、これまで何によって行動して来たかという
と、「**人間の知恵によって**」ではなく、「**神の純真と誠実によって**」、また、「**神の恵みによって**」移動し滞在してきた(「**行動してきた**」の原語の意味) ことだ、と力を込めて語るのです。それは、「**世の中で、とりわけあなたに対して**」とありますから、他者に対して、とりわけ、同じ信仰者に対しては、罪深い自分を赦して下さった憐れみ深い神様を考えながら行動してきたのだ、と言っているのです。

2 (13) 聖書の福音は誰にでも読めば理解できるもの。

「**わたしたちは、あなたがたが読み、また理解できること以外何も書いていません**」。パウロが彼らに書いた手紙のことを言っているのですが、ここで語っている内容は聖書にも当てはまります。すなわち、書いてあることをちゃんと理解していくなら誰にでも神様の恵みが分かる、それが聖書です。宗教改革者ルターが聖書を民衆ドイツ語に訳した理由もそこにあります。あとは、自己流でない正しい読み取りをすることです。

3 (14) 他者を恐れず、迎え入れることができるようになる恵み!

「**ある程度理解しているのですから**」。興味深い言い方です。他者を恐れるのは、相手に分からない所があると不安を覚えるからでしょう。しかし、パウロはむしろ、「**ある程度理解しているなら**」それでいい、と考えています。なぜか。ここで「**ある程度理解している**」と言っているのは、パウロがキリストの福音を宣べ伝えていることを指しています。少しでもキリストの福音を理解したなら、主の体なる教会とは赦し合う者たちの群れであることを知っているはずです。今日は長老と執事の任職式があります。長老と執事がまずそのような思いで教会の全ての人に向かって行くとき、それがよき範となり、教会は皆が信頼し合って生きる「**神の家族**」となって行くことでしょう。重くかつ光栄な務めです。